



令和元年度
**障害者芸術文化活動
 普及支援事業**



近畿ブロック広域センター

**障害とアートの相談室
 事業報告書**



◎はじめに	2
-------	---

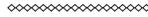
◎Ⅰ．近畿ブロックの障害のある人のアート活動に関する調

●概要・調査の目的	3
●調査の方法	3
●調査報告	5
・アンケート調査	5
・訪問調査	9

◎Ⅱ．展覧会『であう、つたえるをかんがえる』

●展覧会の概要	37
●『であう』ワークショップで大事にしたこと	38
●展覧会をふりかえって	41

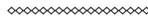
はじめに



私たち、一般財団法人たんぼぼの家は2014年度より「障害とアートの相談室」を開設、奈良を中心に、障害のある人のアート活動を支え、広めていくことを目指し、相談の受付や、創作支援を学ぶためのセミナー、展覧会など、さまざまな事業を実施してきました。また、2018年、2019年度は「障害者芸術文化活動普及支援事業」（厚生労働省）の「近畿ブロック広域センター」を受託、近畿の各府県にある支援センターと連携を図りながら活動を続けてきました。

2019年度は、新型コロナウイルス感染症の広まりを受け、一部実施ができなくなったものもありましたが、下記の取り組みを中心に事業を進めてきました。

取り組み



- ☞相談受付：電話やメールにて、障害のある人のアート活動に関する相談事を受け付けました。
- ☞調査：昨年度に実施したアンケート調査の分析と、福祉施設への訪問調査を通じ、近畿のなかでどのような取り組みが行われているのか、実態の把握を行いました。
- ☞展覧会「であう、つたえるをかんがえる」展：近畿の福祉施設で生まれている素敵な表現を、ホステルやカフェといったスペースのみなさんと一緒に選び、飾る展覧会を実施しました。
- ☞研修：障害のある人のアート活動の支援の方法や、そもそもアートとは何かということを学ぶための研修会を企画しました（新型コロナウイルス感染症の影響を受けセミナーは中止、その代わりとして映像の配信を行いました）。
- ☞「近畿ブロック連絡会議」：近畿各府県の支援センターのスタッフや行政の職員を招き、情報共有や議論を行うための会議を継続的に開催しました。

本報告書では、近畿の障害のある人のアート活動の現状や、そこで生まれている表現を広く伝えていくことを目指し、この事業のなかから特に「調査」と「展覧会」に関して紹介します。

一般財団法人たんぼぼの家「障害とアートの相談室」

I. 近畿ブロックの障害のある人のアート活動に関する調査

◆概要・調査の目的

障害者芸術文化活動普及支援事業においては、平成30年度より、はじめて近畿ブロック広域センターが設置されることになった。これにともない、改めてブロック内の障害のある人のアート活動の全体像を把握すべく、近畿二府四県（滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山）の福祉施設を対象とした調査を行うことにした。

◆調査の方法

調査においては、アンケートによる“聞き取り調査”と、“訪問調査”を行った。

1 アンケート調査：聞き取り（平成30年度に実施）

1…滋賀県、和歌山県への調査

滋賀県、和歌山県に関しては、各県の行政が主体となり、毎年、県下の全ての障害者福祉施設を対象にしたアンケート調査を独自に実施しているため、その結果を共有してもらい、データの収集を行った。

2…奈良県への調査

奈良県は、当法人が2014年度に実施した、県下の障害者福祉施設や、特別支援学校、病院を対象とした調査の結果を参考にした。

3…京都府、大阪府、兵庫県への調査

これまで上記のような調査を行っていなかった京都、大阪、兵庫の三府県に関しては、当法人よりアンケート票を送付し、調査を行った。送付対象としては、全ての障害者福祉施設を対象にしてしまうと、あまりに調査数が多くなってしまうため、一般にアート活動を行っていることが多いと言われる「生活介護」、「就労継続支援B型」の2サービスを行っている施設を対象とした。

2 アンケート調査：訪問（令和元年度に実施）

上記のアンケートの回答団体を中心に、「独自にアート活動（美術・舞台芸術を問わず）を継続して行ってきた団体」、「これまでにないようなアート活動を近年はじめた団体」を基準とし、数団体を抽出。訪問のうえ、見学とインタビュー調査を行った。

近畿圏における障害のある人の芸術文化活動に関する調査

本アンケートは、「平成30年度障害者芸術文化活動普及支援事業」(厚生労働省)の一環として、一般財団法人たんぼの家の家が実施するものです。近畿圏内で行われている、障害のある人たちのアート活動の調査を目的としています。差し支えない範囲でご回答いただけますと幸いです。
 なお、本アンケートで調査しているアート活動には、絵画や陶芸といった美術活動から、織物や木工といったものづくり、ダンスや演劇といったパフォーマンス活動、書道や詩作といった文化活動を含みます。本アンケートは事務局で集計した後、本事業の報告冊子やウェブサイト等に掲載いたします。あらかじめご了承ください。

アンケートのご返送方法

- ①郵送のご返送**
アンケートにご記入後、同封の返送用封筒に入れていただき、ご返函ください。[※後納郵便の手続き上、2月4日以降にお送りください]
- ②FAXのご返送**
アンケートにご記入後、右記のFAX番号までご送信ください。[0742-49-5501]
- ③メールのご返送**
アンケートにご記入後、アンケート用紙をスキャンしていただき、データを下記のメールアドレスまで、お送りください。
[artsoudan@popo.or.jp]
- ④ウェブサイトのご返送**
本アンケートはウェブサイトでの回答も受け付けております。私たちのホームページ「障害とアートの情報室」をご検索の上、トップページの「お知らせ」にある「アンケート調査のお問い合わせ」よりご回答いただくか、下記のアドレスに直接アクセスし、ご回答ください。
[https://goo.gl/forms/aN4HouDKgg8YngCr2]

I 基本情報をお教えてください

事業所名 利用者数

記入者名(役職)

〒 -

住所

連絡先 TEL. FAX.

メールアドレス

サービス種別

利用者の障害の種類

1

II 関心について

- 障害のある人のアート活動に関心はありますか。 (①ある ②ない)
- 現在、施設の中でアート活動を行っていますか。 (①行っている ②行っていない)

III アート活動を行っていると回答された方はAの設問にお進みください。「行っていない」と回答された方はBの設問にお進みください。

A-1 活動の内容に関して

- どのような活動を行っているか、具体的に記入ください。
 ①絵画 ②陶芸 ③織物 ④木工 ⑤版画 ⑥音楽 ⑦ダンス ⑧演劇 ⑨その他()
 活動の内容に関して、詳しくお書きください。
- アート活動は、次のどちらの活動として行っていますか。
 ①障害のある人の仕事として ②それ以外の活動(余暇、創作活動など)として
- 活動の目的をお教えてください

A-2 体制に関して

- 活動に参加している障害者の人数 (人)
- 活動を運営しているスタッフの人数 (職員 人) (外部からの講師やアーティスト 人)
 ※3、4は外部からの講師やアーティストを招いて活動を行っている場合の質問となります。
- 講師やアーティストには謝金を支払っていますか (①支払っている ②支払っていない)
- 差し支えなければ、講師、アーティストのお名前、ご所属をお教えてください。

A-3 予算に関して

- アート活動に関して、外部から予算を得て行っていますか。
 ①得ていない(自主財源のみで行っている) ②行政支援(助成金・補助金など) ③企業援助 ④その他()

A-4 発信・作品販売等に関して

- これまでに、展覧会などで作品を発表したことがありますか。該当するものに○をつけてください。(複数回答可)
 ①発表したことはない ②個人で開催した ③グループ展へ参加した ④公募展へ出展した ⑤その他()
 グループ展、公募展等に関しては、よろしければ具体的にお名前をお教えてください。

2

2. 作品を販売されたことはありますか、ある場合はどのように販売を行いましたか。該当するものに○をつけてください。(複数回答可)
 ①販売したことはない ②画廊を通じて ③個人売買 ④その他()
3. 作品が販売された場合や、著作権利用された場合(グッズのデザインに作品が使われるなど)には、作者に報酬を支払っていますか。
 ①支払っている ②支払っていない
 支払っていると答えた方の中には、報酬の支払いのルール(販売価格の何%を本人に支払うかなど)を決めている場合も、差し支えなければお教えてください。

4. 音楽やダンス、演劇などのパフォーマンス活動を行っている場合、演奏会や発表会などで、外部に向けて活動を発表したことがありますか。ある場合は詳しくお書きください。
 ①ある ②ない

A-5 活動を行う上で何か課題はありますか。当てはまるものがあればご記入ください

1. 活動を行う場所に関して(例:活動できるスペースがない)
2. 人材について(例:専門的な知識のあるスタッフがいない)
3. 資金について(例:活動に必要な予算がない)
4. 情報について(例:障害のある人のアート活動に関する情報が少ない)
5. きっかけについて(例:そもそもどのように始めれば良いかわからない)
6. その他

B-1 何か行ってみたいアート活動はありますか

- ①絵画 ②陶芸 ③織物 ④木工 ⑤版画 ⑥音楽 ⑦ダンス ⑧演劇 ⑨特に無い ⑩その他()

3

B-2 アート活動を行おうと考えた時に、何か課題はありますか。当てはまるものがあればご記入ください

1. 活動を行う場所に関して(例:活動できるスペースがない)
2. 人材について(例:専門的な知識のあるスタッフがいない)
3. 資金について(例:活動に必要な予算がない)
4. 情報について(例:障害のある人のアート活動に関する情報が少ない)
5. きっかけについて(例:そもそもどのように始めれば良いかわからない)
6. その他()

IV その他

1. 課題に対し、どこからの(例:行政、企業、大学、NPOなど)、どういった支援(例:資金的な援助、講師派遣、研修の実施など)があれば良いと思えますか、ご希望があればお教えてください。
2. 今後、特に参加してみたい研修等がありますか。当てはまるものがあれば○をつけてください。
 ①制作の支援に関する研修 ②展覧会のつくり方など、アートの発信に関する研修 ③作品の販売に関する研修 ④グッズや商品づくりに関する研修 ⑤著作権など、アート作品にまつわる権利に関する研修 ⑥その他()
3. お知り合いに、障害者の芸術文化活動に取り組む施設や団体があればお教えてください
4. 障害のある人が参加できる地域のアートスペース(絵画教室やダンス教室など)が身近にございましたらお教えてください
5. その他、今後の目標等、ご自由に記入ください

ご協力ありがとうございました。この調査を近畿の障害者芸術文化の発展に活かしてまいります。

4

◆調査報告

①アンケート調査（※本報告では、当法人が直接実施した京都、大阪、兵庫の調査結果を中心に掲載する）

1) 京都、大阪、兵庫に送付したアンケート票

京 都	送付数：440	回答数：81（18.4%）
大 阪	送付数：1481	回答数：184（12.4%）
兵 庫	送付数：1020	回答数：125（12.2%）

2) 京都、大阪、兵庫の調査結果概要＝まず、各府県の回答率は以下ようになった。

次に、各府県の結果に関し、いくつかの設問を抽出して紹介する。

[京 都]

●アート活動に関する関心、取り組みの有無について [設問 II]

障害のある人のアート活動に関心があると答えた施設は95%と、他府県に比べやや高いものの、アート活動を行っていると答えた施設は49%と、他府県よりも少し低い結果となった。

●アート活動の内容に関して [III-A-1]

行っているアート活動に関しては絵画が31%と最も多く（これは他府県も同様）、次いで音楽が20%となっていた。また、その他の活動として「組みひも」を挙げている施設もあり、地域性が現れていると言えるだろう。また、アート活動を障害のある人の仕事として行っている施設が50%と他府県に比べて最も高く、これも、地域の特産品の制作を行っている施設が多いことが一つの理由なのかもしれない。

●予算に関して [III-A-3]

行政からの支援（助成金・補助金など）を受けている（17%）、企業からの援助を受けている（3%）と、他府県に比べて外部予算を得ている施設が最も多い。とはいえ、77%の団体は自主財源のみで活動を行っている。

●発表、販売に関して [III-A-4]

展覧会などで作品を発表したことがある団体は74%と、他府県と大きな差はなかった。内訳としては公募展への出展が38%と最も多く、具体的には「京都とっておきの芸術祭」、「共生の芸術祭」など、京都の行政が主導して実施しているイベントの名前が多く挙がっていた。作品の販売の経験があるという施設は58%、作品が販売されたり、二次利用された場合に作家への報酬を支払っているという施設は30%であり、これは他府県に比べて平均的だった。パフォーマンス（音楽、ダンスなど）を発表したことがある、と答えた施設は26%であり、これも他府県と同程度だった。

●感じている課題について [III-A-5、B-2]

場所に関する課題としては、活動をするためのスペースがない、狭いといったことが1番多く

挙げられたほか、画材・作品の保管場所がないことも課題として挙げられていた。人員については、アート活動を行えるだけのスタッフの余裕がない、といった課題の他、外部の専門家などとのつながりがほしい、といった課題もあった。資金に関しては、活動の予算が少ない、という施設が多かった。またその他、イベントや展覧会に出展したいが情報が無い、といった課題も挙げられた。

[大 阪]

●アート活動に関する関心、取り組みの有無について [設問 II]

関心があると答えた施設は91%と他府県に比べて平均的だが、取り組んでいると答えた施設が60%と、他府県に比べ高い結果となった。

●アート活動の内容に関して [III-A-1]

活動の内容としては他府県と同じく絵画が29%と最も多いが、次いで刺繍・織物・編み物が16%となっており、これは他府県とは異なる特徴と言える。アート活動を障害のある人の仕事として行っている施設は29%で、これは他府県と比べて平均的だった。

●予算に関して [III-A-3]

外部予算を得ていない（自主財源のみで活動を行っている）施設が94%と、他府県と比べて最も高い結果となった。外部予算を得ているなかでは、企業からの援助が2%、行政からの支援が3%であった。

●発表、販売に関して [III-A-4]

展覧会などで作品を発表したことがある施設は75%であり、他府県と大きな差はない。発表の機会としては公募展への出展が30%と最も多く、具体的には「堺市障がい者作品展」など行政主催のものから、「かんでんコラボ・アート」といった企業主催のもの、「アールブルット北摂」といった民間団体主催のものまで幅広く、他府県に比べて多数の展覧会の名前が挙げられていた。作品の販売を行ったことがあるという施設は53%と、他府県と同程度だった。作家への報酬の有無に関しては、あると答えた施設が36%とわずかながら他府県より多かった。パフォーマンスを発表したことがあると答えた施設は25%と、他府県と同程度。その他、他府県と異なる点として、発表の機会として「ちんどん」や「人形劇」の依頼公演を行っている団体があった。

●感じている課題について [III-A-5、B-2]

場所に関する課題としては、活動のスペースがない、狭いということが一番に挙げられたほか、画材・作品の保管場所がないことが挙げられていた。人員に関しては専門的な知識をもったスタッフがいないと答えた施設が33件と多く、根本的な人員不足を挙げた施設も5件ほどあった。資金については予算が少ない、もしくはないという施設がほとんどで、「予算を組んで活動しているが、販路が未開拓なためやればやるほど赤字になる」といった答えもあった。その他、障害のある人のアートに関する情報についても、ない、少ないとする施設が多く、情報があっても動けないとの答えもあった。

[兵 庫]

●アート活動に関する関心、取り組みの有無について [設問 II]

関心がある施設が90%、取り組みを行っている施設が53%と、他府県に比べるとわずかに低い結果となった。

●アート活動の内容に関して [III-A-1]

活動の内容としては、絵画が31%で最も多く、次いで音楽が18%と、京都と同様の結果となった。アート活動を障害のある人の仕事とし行っている施設は17%と、他府県に比べて低い。また、活動の目的は「仕事としての作業のため、工賃のため」が9件に対し、「余暇、楽しみのため」との答えが28件であり、他府県に比べて余暇としてのアート活動の割合が高い。

●予算に関して [III-A-3]

外部予算を得ていない施設は90%と他府県に比べて平均的。得ている施設のなかでは行政の支援が8%と最も高い。

●発表、販売に関して [III-A-4]

展覧会などでの作品を発表したことがある施設は78%と、他府県と比べて平均的だった。発表の機会としては公募展への出展が42%と最も多く、具体的には「HUG展(こうべ障がい者芸術フェスタ)」、「西宮市福祉作品展」、「竹野地区文化まつり」、「北区ふれあいフェスタ」など、地域の展覧会の名前が多く挙がった。一方、作品の販売に関してはしたことがあると答えた施設が約30%と、他府県に比べて20%ほど低い結果となった。これは、前述したように「余暇、楽しみのため」に活動を行っている団体が多いことが一つの理由となっていると思われる。作家への報酬の有無は26%に留まるものの、これは他府県と比べてそこまで低い方ではない。また、パフォーマンスの発表を行ったことがある施設は27%と、これも他府県と同程度だった。

●感じている課題について [III-A-5、B-2]

場所についてはアート活動専用のスペースがないということが一番に挙げられ、それに伴い、集中できる場所がつかれないといった答えもあった。また、活動のスペースだけでなく、展示場所がほしいという声も聞かれた。人員については専門的な知識をもったスタッフがいらない、基本的に人員が不足しているといった答えがあったほか、ボランティアスタッフがほしいという要望もあった。資金については予算が少ない、ないという施設がほとんどであった。その他、障害のある人のアートに関する情報についてもない、少ないという答えが多く、「県内からの情報がほとんどで県外からの情報はごくわずか」「散発的なニュースはあるが、ひとつのジャンルとしてのまとまった情報はないように思う」といった具体的な声も聞かれた。

3) 二府四県のデータの分析

最後に、京都府、大阪府、兵庫県の調査結果に、滋賀県、和歌山県から提供いただいたデータ、および当法人が実施した奈良県の過去の調査データを合わせ、二府四県の障害のある人のアート活動に関する分析を行う。

アート活動に取り組んでいる福祉施設のうち、取り組んでいる活動としては、調査対象の全ての府県で「絵画」が一番多かった。

また、アート活動に対する関心の有無については、「関心はある」と答えた施設がいずれの府県でも90%以上なのに対し、「実際に取り組んでいる」は、奈良県の60%から京都府の49%まで少し幅があるものの、平均して55.51%に留まった（この結果は、関心のある施設だからこそ、アンケート回答に協力してくれている、ということももちろん考慮すべきだが）。関心がありながらも、取り組めないのはなぜか。その理由として、どの県でも挙げられていた課題が、場所、資金、人材の不足である。この3つの不足は、どれか1つだけがあってもまだ実現は難しく、なるべくすべてが揃っている必要がある。しかし、そもそも職員が不足しているといった施設もあるなか、それぞれの施設が独自にこれら3つの不足を解決するのは非常に困難だろう。専門知識をもった人材の不足についても、誰かひとりの職員が勉強して身につけたとしても、その人が辞めてしまえば、また同じ課題を抱えることになる。属人性の高い解決方法のみだと、継続性が懸念される。もちろん、各職員の知識もあった方がいい場合もあるが、そこだけに負わせることは現実的ではない。

つまり、こうした課題を解決するためには、「各施設が利用可能な仕組みを、施設外につくること」が有効だといえよう。具体的には、下記のようなことが行える仕組みがあるとよいと考えられる。

* 制作・保管スペースの提供

* 研修体制の充実

* 講師、専門家派遣

* ボランティアの人材バンク

* 販路の開拓（仕事へつなげる仕組みづくり）

●そして、これらの支援をすべて無料で利用できることが望ましい。

また、こうした活動が増えれば、権利意識の普及も必要になってくるだろう。そこにも、専門家のサポートは欠かせない。

また、調査全体を通し見えてきたこととして、近年、アール・ブリュットが注目され、障害のある芸術家の作品の価値が高まっていることを意識する施設が多いことと、一方でそれを懸念する施設も少なくないということがある。そういったところとは距離をおき、利用者（障害のある人自身）の「生活の楽しみ」「生涯学習」としてアート活動に取り組みたい、という声は、今の状況だからこそ尊重されなければならない。そして、作品価値に関わらず、支援を受けられる体制が作られることが重要だと考えられる。

1つ目の部屋には大きめのテーブル2台が前後に並んで置かれ、そこでは3名ほどの利用者がスタッフとともに商品のパッケージ作りなどの軽作業を行っていた。また、壁際に置かれたテーブルではひとりの利用者がタブレット端末でYouTubeを観ながら巻物のような紙にペンで絵を描いていた。部屋の周囲に置かれた棚や壁には、木工で作られたアート作品や絵画作品が置いてあったり、飾ってあったりされていた。



次に通された部屋は先ほどの部屋よりも広く、そこでもパッケージづくりやタオル折りなどの軽作業が行われていた。また、この部屋に隣接する部屋にはレーザーカッターなどの工作機械が置かれており、木工作业をする際にはそれらを利用するという。ちなみに、軽作業を行っている利用者は、その作業のためにオリジナルの木製自助具をつかっており、恐らく、これらの自助具もレーザーカッターで製作したのだろうと想像された。どちらの部屋でも利用者のみなさんは落ち着いて作業をしており、穏やかな時間が流れていた。

次に案内していただいたのは、はじめの建物と同じ道路に面した、歩いて2、3分程のところにある2階建ての建物だった。1階が活動スペースになっており、2階は法人の事務所だそう。活動スペースはひとつつながりの大きな部屋で、利用者のみなさんは午前の活動を終え、みんなで昼食の準備をしているところだった。この部屋にも絵画などの作品がたくさん飾られており、壁際のロッカーの上にはクラフト紙の作品なども積まれていた。このスペースで印象的だったのが、部屋の中ほどに置かれた個別のテーブル席に座り、ポケットティッシュの空き袋（ティッシュが入っているビニール製の袋）をタロット占いのように並べている利用者だった。彼は普段は絵画の創作などを行っているそうなのだが、趣味？としてポケットティッシュの袋を集めているそうで、空いた時間にはそのティッシュの袋を眺めたり、並べたりして愛でているのだという。スタッフによると彼がティッシュ袋にこだわる理由は分からないそうだが、優しく、丁寧にティッシュ袋を扱うその手つきはとても優雅で、何かパフォーマンスを見ているような気分になった。（大井）

インタビュー [山崎慎也さん（サービス管理責任者）]

Q. 山崎さんの経歴に関して

- もともとは東京のアパレル業界でスタイリストとして活動していたのだが、阪神淡路大震災をきっかけに、地元である神戸に帰省。
- その後、社協などを経て、神戸市の障害者福祉施設（旧法通所授産施設）ではたらくことに、そこで利用者のアート作品にふれ、施設の中でアート活動を行いたいと思いはじめる。
- 当初はなかなか施設の理解を得られなかったのだが、各地で緩やかに広がりはじめた障害者のアートムーブメントも追い風となって、余暇活動など空いた時間にはじめることができるようになったとのこと。のちに何人かの作家を発掘、コンクール等に入賞する利用者も出はじめ、施設の中でも認められるようになった。
- 社会において障害者のアート活動が注視されはじめたころにあっても授産施設という時代の名残は色濃く、障害のある人の巧緻性や理解度、生産性などの能力評価に応じて工賃を支払うという、健常者と言われる存在に近づけるための支援や評価システムに疑問を感じていた。
- そして、どんな人でも、例えばゴロゴロしているだけと捉えられる人であったとしても、

▼絵を描く利用者



それはその人の仕事として「彼がこの和やかな、時に刺激的な空間をつくってくれている」と捉え、たんなる生産性による評価ではなく等しく時間給として工賃を支給できる場を求めるようになる。ライフスペース・プロペラに入職し、その願いが叶いはじめる。

Q. プロペラで活動が始まった経緯、現在の活動について

- 入職当初は8人くらいの利用者が下請け作業に汗する小規模作業所でした。
- そのうちのひとりが描く作品が原始的なんだけどユーモラスでやさしい作品で...
- その後、学校の生徒を対象としたアトリエを開講したり、これまでに携わり関係を築いた利用者さんの応援などもあって口コミでアート活動に興味ある人が集まってくるようになり利用者も増えはじめた。
- アートに特化するのではなく、軽作業や健康面、レクリエーション活動も充実させることができることを目指している。そして工賃も等しく時間給となった。
- （上記に補足）それに加えて、利用者がつくった絵画作品や商品が売れた場合、絵画作品であれば売上の100%を、商品（缶バッジなど）などであれば材料費を除いた6割を利用者に還元するようになっている（残り4割は施設全体の工賃として還元している）。

Q. 課題や今後の展望について

- まだ、自分たちの活動の中では、福祉サービスと創作活動のあいだに隔たりがある（ケアとアートが繋がっていない）というような実感をもっている。
- 一般的な日常の中にアートやデザインがあたりまえにあるように、社会福祉事業のなかにも、アートやデザインといったものがもっと増えるべきというような意識を、スタッフとも共有していきたいと思っている。
- 発信力の不足を感じている。ホームページを整備したりして情報を発信していきたい

と思っているのだが、なかなか取り組めていない。たくさんの作家がいるのもっとそれを伝えていきたいと思っている。

- また今後、もし資金ができればアトリエとギャラリーをつくりたいと思っている。人が自由に入出りでき、作品を展示できるスペースがあることが大切だと思っている。
- ギャラリーを通じて施設の間口も広がるし、作家からしても観られることで意識が変わっていくだろうと思っている。

Q. 障害のある人の創作活動のサポートについて

- 各作業場に2～3人のスタッフがつけるような体制にしている。ただし、スタッフの役割はどちらかというと軽作業をしている利用者の手助けで、創作活動を行っている利用者に対しては、画材を渡したり、見守ったりといった程度のサポートにとどめている。ただ、利用者それぞれの必要に応じて、何を描くかのモチーフを提案したり（雑誌を渡したりなど）といった働きかけをすることもある。
- 商品をつくる際には、例えば、利用者が絵を描いた紙を袋にしたり、といった具体的な手助けをすることもある。
- 画材に関しては基本的によいものをつかってもらうようにしている。材料が変わるだけで見え方も変わるし、劣化せずに残すことができる。
- 今のところ、アートを専門的に学んできたようなスタッフはいない。ただし、ものづくり（アクセサリーづくりなど）を行っているスタッフはおり、彼らの特技を生かした商品づくりも行っている。
- また、スタッフは一律に個別支援としての創作活動を大切に思うような意識は共有できていると思う。
- 作品の管理に関しては、作家ごとに専用の袋を用意して、貯めていってもらうようにしている。
- 特に作家として注目され、値段がついているような作家の作品に関しては、施設側でしっかりと保管したりしている。
- ただし、作品も増え続けているので、今後それをどう整理していくかは検討していかなければならないと思っている。
- 知的財産権の扱いについては、利用者との間で、創作した作品の著作権に関する契約を交わすようにしている。
- 契約書に関しては、たんぼぼの家がついているものを参考にしたり、弁護士に相談したりしながら作っていった。
- 本当であれば1作品ごとに契約を結びたいとは思っているのだが、そこまではできていない。

Q. 最近の活動について

- 2017年に、近所の風呂屋の跡地を活用して「戎ラボラトリーと風呂べら展」という展覧会を開催した。
- 予算はそんなに多くなく、展覧会の造作などをどうしようかと思っていたのだが、建築家に相談するにあたって、ライフスペース・プロペラで生まれた作品を見せたところ「ぜひ一緒にやりたい」と答えてもらえ、実現に至った。
- 大きく宣伝はできなかったため、来場者数自体はそこまで多くはなかったものの、美術関係者や学校関係者など、活動を伝えたい人たちには観てもらうことができた。
- 翌年にはデザイナーらとコラボし六甲山麓の間伐材を使用したカホン作りに取り組む、2019年デザインクリエイティブセンター KIITO という場所で美術家の展示作品スペースを間借りしみんなで演奏、発表することができた。

②一般社団法人 schomojina 生活介護事業所 スコモジーナ

調査日：2020年1月9日（木）

調査者：大井卓也

基本情報

- ・サービス種別：生活介護
- ・所在地：姫路市西中島 293-3
- ・利用者数：8名
- ・団体の沿革：2016年に設立された事業所。
- ・活動内容：衣・食・住をテーマに、絵画の制作や刺繍などの表現活動や、畑での農作業など、日々を楽しむプログラムを実施している。

見学内容

施設に到着したのは16時ころ。施設は最寄りの「野里駅」から歩いて200メートルほどの高架下であり、イタリアンレストラン「オステリアバルキーニョ」と1つの建物になっている。外見はコンテナハウスのような建物で、白く塗られたファサードの前には木製の植木鉢が並び、とてもお洒落な佇まいだった。

建物に入るとちょうど活動が終わった時間で、メンバーとスタッフのみなさんが和気あいあいと一日の終わりの体操をしているところだった。建物は入ってすぐの一番広い部屋がメンバーの主な作業スペースになっているようで、絵葉書サイズの紙に描かれた絵が乾燥のために干されていたり、さまざまな刺繍の作品が壁に飾られていたりした。その部屋の奥には本棚や机の置かれたもう一回り小さな部屋があり、さらにその奥の扉を抜けると、レストラン「バルキーニョ」とつながっていた。

体操が終わり、メンバーのみなさんが片付けを済ませて帰った後、スコモジーナの代表・池端さんに案内をしていただき、施設内やメンバーのつくっている作品をご紹介いただいた。

詳しくはインタビューの項で後述するが、スコモジーナでは「衣・食・住」をテーマにさまざまな創作活動を行っており、「衣」では刺繍などの布や糸を用いた制作を、「食」では野菜作りなどを、「住」では、暮らしを楽しむこととして、季節のイベントなど行っているという。特に、見せていただいた刺繍の作品たちはとてもユニークなものばかりで、可愛い動物の絵柄を布に刺繍した作品や、シャツや布をその原型が分からなくなるほど刺繍糸でぐるぐるに縫い固めた作品、余った短い刺繍糸をボンドで玉状に固めた作品など、オリジナリティあふれる表現がたくさん生まれていた。

また、スタッフのみなさんは、スコモジーナの日々を通じて生み出された表現を発信し、広げていくことを大切にされているようで、メンバーが絵を描いた紙を封筒にしたり、みなさんに折々のお便りとして絵葉書を送る、刺繍作品から洋服やオーナメントをつくるなど、さまざまなアイデアで作品を活用されているのが印象的だった。また、それらの作品は箱やファイルで綺麗に整理されて保管されており、そこにもスタッフのみなさんの作品に対するリスペクトを感じることができた。（大井）

▼施設の外観





インタビュー [池端裕子さん（代表理事）]

Q. 池端さんの経歴について

- もともと20年間、障害のある人の支援を行ってきた。そして以前に勤めていた事業所を退職するにあたり、次にはたらく場所を探したのだが、自分が本当にはたらいてみたい施設がなかなか見つからなかった。
- そこで、自身が絵やものづくりが好きということもあり、そういった楽しい経験をみんなのできるスペースをつくりたいと思い、スコモジーナを設立するに至った。
- 特に「食」は暮らしを豊かに、楽しくするためのものとして重きを置いていたため、施設の立ち上げと同時にレストラン「バルキーニョ」を誘い、このスペースで一緒に活動をはじめることになった（バルキーニョ自体はもともと他所にあったレストランで、20年の歴史があるそう）。
- スコモジーナの給食提供をバルキーニョが行う、スコモジーナで作った素材をバルキーニョで調理して提供する、といった循環が生まれるスペースになっている。

Q. スコモジーナの成り立ちについて

- スコモジーナの名前の由来は「好きこそもの上手なれ」。絵を描いたりといった、好きなことを一緒にやっていたりするような施設を作りたいと思っていた。
- 開所した当時は利用者が0人だったのだが、その後、強い行動障害があり、ほかの施設には対応できない利用者の方が1名来られ、その後も行動障害のあるメンバーさんが来られるようになった。

- なので、はじめから絵を描いたり、ものづくりをしたい人が集まってきたというわけでもなく、まずは座ること、静かにすること、といったことから始め、彼らと一緒に何ができるのか、彼らは何が得意で、何が不得意なのか、ということを知ることから活動をはじめてきた。
- 職員の募集に関しても「ものづくりが好きな方」を中心に声かけをしてきたため、介護の経験がなかったスタッフも多い。
- また、設立後半年くらいは外部からアートディレクションをしてもらおう方に関わってもらっていたが、その後は自分たちだけで活動をしている。

Q. スコモジーナの活動について

- 「衣・食・住」の3つのワークを柱にプログラムを実施している。「衣」であれば針、糸、布をつかった活動、「食」なら食べる、野菜づくり、「住」は暮らしを楽しむということで、もちつきなど、季節のイベントを行ったりしている。
- このように活動を大きな柱に分けることで、それぞれのメンバーがどういったことに関心があり、参加していけるのか、見守りながら活動を続けている。
- 例えば、「食」のワークであれば、施設前のプランターで野菜を育てているほか、「援農」として近隣の農家のお手伝いに行き、その日に採れた野菜をもらったりしている。そしてその野菜をつかった料理を食べ、また、食べたものは絵や文字の作品として記していく、という風に、それぞれの活動が暮らしや創作活動とつながっていくようなプログラムを行っている。
- 暮らしのなかで、自分たちがつくったものでおなかを満たす、心を満たす、ということ大切に考えている。
- 一応、年間の行事予定を作り、それに合わせて活動を計画はしているものの、メンバー各自のやりたいことを尊重し、それぞれのペースに合わせて活動を実施している。

Q. 活動の発信について

- 今のところ、スコモジーナの活動のなかで生まれた作品などの販売は行っていない。それは、施設の設立当初から、販売などは「5年後から行おう」と決めていたから。
- 5年という基準を設けたのは、まずはメンバーと出会い、一緒に過ごし、彼らの手に合うものを見つけていくための時間が必要だと思っているためである。今は、まだ表現が生まれるための「土づくり」をしているような段階。
- そのため、はじめから「こんな商品・作品を作らなくては！」という明確な目標があるわけではなく、色々な創作方法を試すことができ、楽しく感じている。

Q. 地域とのつながりについて

- だんだんと活動が知られてくるにつれ、地域のみなさんから糸や布といった素材をいただけるようになってきたり、といったつながりが生まれてきた。
- また、年に一度スコモジーナの活動を伝えるイベント「周年祭」を開催している。
- 1年目と3年目はスコモジーナの建物で開催したが、2年目の時には近所の美術館を借り、「Hands Work Exhibition」として、刺繍の作品展示などを行った。

Q. 創作活動の支援について

- 先ほども説明した3つのワークを中心に、それぞれのメンバーのやりたいことをやってもらうようにしている。
- ただ、自身では決められないメンバーもいるため、そんな時にはスタッフが声かけを行い、一緒に活動を考えるようにしている。
- また、日々のワークのなかで、「ここまでできるんだったら、もっとこんなことができるかな」、「ここをもうちょっと崩してみたらおもしろいかな」といった視点を持ち、活動を展開させていくようにしている。

Q. 今後の展望、やってみたいことについて

- スコモジーナとしては、絵や字の作品を売っていきたいと思っている。ただ、いわゆる「作品を作って売る」というだけではなく、作品の知的財産権も一緒に譲渡して、販売された先でデザインや商品づくりに展開してもらおう、というような仕組みが作れないかと思っている。
- また、自身（池端さん）でも、子供服をつくる会社をスコモジーナとはまた別で立ち上げ、そこで彼らの表現をデザインに活用していくようなものづくりをしていきたいと構想している。
- （上記のアイデアについて）なぜそういったデザイン利用の活動をスコモジーナの内部だけでやろうとしていないかという、ひとつの事業所のなかですべてをやろうとすると、みんな手いっぱいになってしまうし、また、メンバーにも「いつまでにこの作品を作らなければならない」といった制限を設けてしまうことにもつながってしまうと考えているため。そこで、あえて外部に会社をつくり、デザインする人や制作する人と協働できる体制にすることで、彼らが自由に創作できる環境をつくりたいと思っている。



シャツを縫い固めた作品

③社会福祉法人 育夢 糸をかし

調査日：2020年1月15日（水）

調査者：中島香織、大井卓也

基本情報

- ・サービス種別：生活介護
- ・所在地：豊中市服部寿町3-18-12
- ・利用者数：26名
- ・団体の沿革：平成7年に糸をかし作業所が設立、平成15年に社会福祉法人育夢を設立。社会福祉法人育夢において、生活介護糸をかしのほか平成21年以降、共同生活援助ほづみのお宿等計4カ所で障害のある人の自立生活の拠点をもつ。
- ・活動内容：障害のある人の仕事として、人形芝居やちんどん屋などの表現活動を行う。

見学内容

▼舞台となった施設のなか



豊中南インターを降りてすぐ、ふたつの建物に囲まれた駐車スペースに車を停める。玄関にむかうなり、スタッフが歓迎して迎え入れてくださった。

1階はフローリングの広いスペース。ここで稽古をしたり、近隣の福祉施設や保育園から人を招いて公演をすることもあるという。クローゼットや部屋の壁面には人形芝居でつかう人形や小道具などがぎっしりと収納されている。到着したときは、ちょうどお昼時だったため、利用者は2階で昼食をとっており、私たちも同じものをいただいた。味噌汁に入って

いたこんにやくは、糸こんにこん(糸をかしのこんにやく工房)でつくられた「おこんにやくさん」。こんにやくづくりの工程や労力を考えると、到底よびすてにはできない、とつけられた商品名だ。

昼食後、しばらくしてから1階で稽古がはじまった。さきほどまで何の変哲もない部屋だったのが、音響機材、大道具、人形などがセッティングされ数分のうちに舞台に様変わりした。出演する利用者、スタッフが慣れた様子でそれぞれの配置につき、「白雪姫」の人形芝居がはじまった。稽古では話の冒頭部分から最後まで通して演技を進めていった。一通り終わると、講師がセリフの言い回しや登場の仕方をアドバイスするなどして、その場で柔軟に出演者に合わせて内容をブラッシュアップしていった。脚本は、白雪姫をベースにしたオリジナルのもので、見学していた私たちも何度も大笑いする内容だった。さらに、出演者どうしのやりとりでは即興的な部分もあり、見どころのひとつでもあった。利用者だけでなく職員も多く出演していたことも特筆すべき点だ。芝居を見ていて「誰が利用者で誰が職員か」ということは、もはや分からなくなり、そもそもそれは意味のない視点だったと感じた。一人ひとりが本気で、楽しみながら演技をしていた。

人形芝居でつかわれる人形は、演じる人が自分の身体を動かすように人形を操れるよう工夫がされており、ペットボトルなどの身近なものも活用して作られていた。白雪姫のなかでは、二人羽織のようなもの、大きな仮面、帽子のような被り物、などさまざまなパターンがあった。人形を用いずに衣装のみの人もいたが、演じ手の個性とあいまって、登場人物のキャラクターがどれも色濃く表れていた。稽古

が終わるとほどなくして舞台は撤収されて、同じスペースでお茶をのみながら、振り返りを行い、この日は終了した。

糸をかしの人形芝居は「ぬくぬく座」という名前で活動をしている。全員ではないが何名かは生活の拠点も共にしている。そんな一座のなかで培われたユーモアや、それぞれが役割をもっていることの豊かさを感じた一日だった。去り際に目にした上履きにはマジックで不思議な生き物が描かれていた。知らないうちに、職員の上履きに利用者が描いたものだという。日常の些細なやりとりを楽しむ姿がこんなところにも感じられた。(中島)



インタビュー [西口敏江さん(管理者)、森田崇さん(生活介護事業課長)]

Q. 人形芝居をはじめたきっかけ

- 平成3年に西口さんと現在の社会福祉法人育夢理事長である渡邊千芳さんと参加した人形劇セラピーの勉強会がひとつのきっかけとなり、プロ人形劇人 西宮小夜子さんの指導の下、平成7年に無認可の作業所から人形芝居をスタート。法人化するにあたって障害のある人が活動の主体となって地域社会に関わっていくことを目指した。

Q. 活動の概要

- 毎週水曜日に稽古を実施。ほかの日も即興音楽やリズム体操など、外部から講師を積極的に招き入れ活動を行う。利用する人は、22歳から70歳以上の人まで通っており平均すると43歳くらい。障害の区分で見ると重度の人が多く、人形芝居にかぎらず、ちんどんや語り部など何らかの表現活動にみんなが関わっている。
- 演目はひょっとしてシリーズ「白雪姫!」「桃太郎!」「花咲かじいさん!」など、馴染みのある物語を題材にしたもの。
- 職員に対しても、施設内研修として表現のプログラムを行ったり、演劇や紙芝居の専門家に協力をあおぎ講座をもつことがある。
- 公演の収入は工賃として利用者に還元する(材料費などは別)。

Q. 舞台の作品づくりについて

- 忙しいときは月に2回くらいのペースで公演をしていた。今は年間で12～13公演の

依頼があり、時期は10月から12月に集中する。

- 新作をつくるときは、公演を行う傍ら、半年くらいかけて制作する。そこから上演できるようになるにはさらに2～3年ほど稽古を重ねる。舞台の道具や衣装も職員と利用者と一緒に作る。
- 脚本は、ぼんやりと配役を考えながら職員がベースをつくり、稽古のなかで練り上げていく。そうしたプロセスを経るので、完成した作品は、出演者みんなの身体になじんでいて、大きく失敗することがない。
- 公演のほか、参加者が人形を実際に身につけて体験するような企画も実施している。
- 発声や身体トレーニングは毎日欠かさない。また、衣服の着脱などは日常の行為へも反映され、舞台にむけた練習という意識は様々な場面に効果が発揮されている。
- 舞台に立つということは仕事なので生半可な指導はしないようにしている。中途半端なものは見せられないと思っている。

▼不思議な絵が描かれたうわばき



Q. 参加する利用者・職員について

- 出演者は練習よりも本番のほうが抜群にいいパフォーマンスをすることがほとんど。公演を通じて色々な人と交流するのを楽しみにしている。長野県で行われた人形劇のフェスティバルにも3回参加し、泊りがけで遠征した。
- 専門家の人に講師として入ってもらっているが、最初は「こ

こまでできなければ」という意識があったのが、実際はじめてみるとそうはいかない部分もある。そこでどう活動を広げていくか、一緒につくっていくなかで、講師も価値観が広がった部分があるのではと思っている。

- プロにはプロの目線から、職員は日々利用者と接している職員の目線から、プログラムをつくっていける。
- 職員は舞台の裏方や出演者でもある。舞台では職員/利用者としてでなく、対等にパフォーマンスをしている。活動をとおして、それぞれが自分自身をひらいていっている。
- 障害の程度に関わらず、自分も劇団の一員であるという自覚が生まれると、その役割をしっかりと演じることができるようになる。それを見た職員も、この人はこんなことができるのか、と見方が変わってくる。日常のなかにもだんだんと仲間意識が生まれてくると思う。

Q. 特に大事にしていること

- 何かを表現してそれを誰かに受け取ってもらうこと。そうすることでまた、活動そのものの質が深まっていくと考えている。
- 公演では必ず動画の記録をとって、後日見返して振り返りをするようにしている。職員、利用者ともにさまざまな意見が出る。
- 「障害のある人の舞台」としてではなく、まずは人形劇を楽しんでもらうということが強み。そこから交流が生まれたり、障害のことを知ってもらったりして、匿名の障害のある人ではなく、ぬくぬく座の〇〇さんといった風に、壁がなくなって

いくように感じる。学校に上演に行く際も、先生から生徒へ事前に何か教えたりしてもらわないと伝えている。

- 表現活動は障害のある人がもっている力をひきだすことのできるツールだと思う。さらにそれは本人が日々生きていく力を引き出すことにつながると考えている。

Q. 地域との関わりについて

- 近隣の大阪音楽大学ともつながりがあり、糸をかし1階のフリースペース「ぬくぬく劇場」でミニコンサートをひらくこともある。
- 豊中市では施設間留学という制度があり、他施設の職員が研修としてやってくることもある。また、ちんどんの道具は貸し出すことができるので、色々な施設に声をかけている。
- 糸をかしでの取り組みが地域で知られてきたこともあり、最近では特別支援学校の先生から、この生徒はぜひ糸をかしで活動してはどうか、と話があることも。

Q. 今後やってみたいこと

- 以前やったことのあるサインランゲージダンスなどにも活動を広げていきたいが、今行っていることもたくさんあるので、バランスを考えながら取り組みたい。



▲作業スペースの様子

④社会福祉法人豊中きらら福祉会 ワークセンターとよなか

調査日：2020年1月23日（木）

調査者：岡部太郎

基本情報

- ・ サービス種別：就労継続支援B型、生活介護
- ・ 所在地：豊中市服部西町5丁目18-5
- ・ 利用者数：45名
- ・ 団体の沿革：1986年、豊中障害者共同作業所として開所、2002年に社会福祉法人認可、「ワークセンターとよなか」に改名。
- ・ 活動内容：アート班、下請け班、企業内作業班の3つの取り組みにより、ギャラリーショップの運営やイベント・ワークショップを通じた「地域とのつながり」、委託作業や企業内作業を通じた「社会とのつながり」、活動を通じて相手の意見や個性を尊重し、知恵を出しあう「仲間とのつながり」をつくっている。

見学内容

ワークセンターとよなかの「アート班」の活動を見学した。幹線道路沿いにあるビルの一階で活動をしており、天井がかなり高く比較的広いスペースで作業をしていた。アート班では絵画、陶芸、アクセサリーづくり、そして後述する、利用者の行為から生まれる不思議な表現までを創作活動として捉え、それぞれにサポート、発信活動をしている。新聞記事にサインペンで落書きのように書き足しながら創作をする人、牛乳パックを細かくハサミで切り刻み、それを立体作品にしている人、ダイナミックに陶土を捏ねて器にする人など、それぞれのペースでやりたいことができる空間になっていた。なかでも渡辺悠太郎さんの作品は、描くモチーフのすべてが「コケちゃん」というオリジナルの鳥のキャラクターになっていて、作品販売や商品へ展開されている。特に陶器へのイラスト展開によって、このワークセンターの収益にもつながっている。

また、毎日自分の机の上で、粘土をつかってテレビ番組のタイトルやCMのタイトルの一部を、記憶を頼りにかなり正確に再現される利用者もいた。彼は完成するとすぐに粘土を壊してしまうため、スタッフが写真に撮ってアーカイブしている。以前もその行為を動画にして展覧会で紹介するなど、日々残らない表現も手近でできる方法で残しているのが印象的だった。外部での展覧会の依頼に柔軟に対応している様子を聞くと、アートの概念を広くとらえ、福祉施設での創造的な活動を社会にとって新しい価値として伝えていこうとする気概を感じた。スタッフが利用者の魅力を共有したり、個別に発信する姿勢は、ほかの施設の活動の参考になるだろう。

また、アート班以外の下請けの活動などを拝見し、豊中市における被保護者就労準備支援事業として、社会の接点をもちにくい人の社会復帰プログラムとしての仕事の場作りなどを紹介いただいた。年間イベントで、お出かけや食事会などを大事にし、それを楽しみに活動している利用者の話もお聞きした。表現活動や仕事とおして、利用者が社会で豊かに生きることをめざした活動をしていることが伝わってきた。いっぽうで、仕事としてアート活動と下請けなどの作業との価値のすり合わせをすることの難しさも課題として挙げられていた。（岡部）

インタビュー [西脇大祐さん (スタッフ)]

Q. アートに関わるスタッフは？

- 全部で4人、そのうち専門的な勉強をしているのは2人。

Q. ワークセンターとよなかで活動が始まった経緯、現在の活動について

- もともと内職をしていたのが、仕事が減ってきた時期があった。自分たちで社会とつながりをつくる機会が必要と、2000年代前半に「アートチャレンジ班」をスタート。
- 豊中市からも、現在のお店ができるような境を紹介され、助成を受けてつくる場と発信する場をつくった。現在は、作業所1階の「アトリエ・ピース」で販売をしている。

Q. サポートのあり方について

- 基本的には利用者のやりたいことを尊重している。
- 創作の幅を広めるために、資料類を準備したり、陶芸の絵付けはスタッフが作品から模写することもあるなど、すべて利用者にまかせずに、スタッフが関わった方がよい部分は部分的にサポートしている。

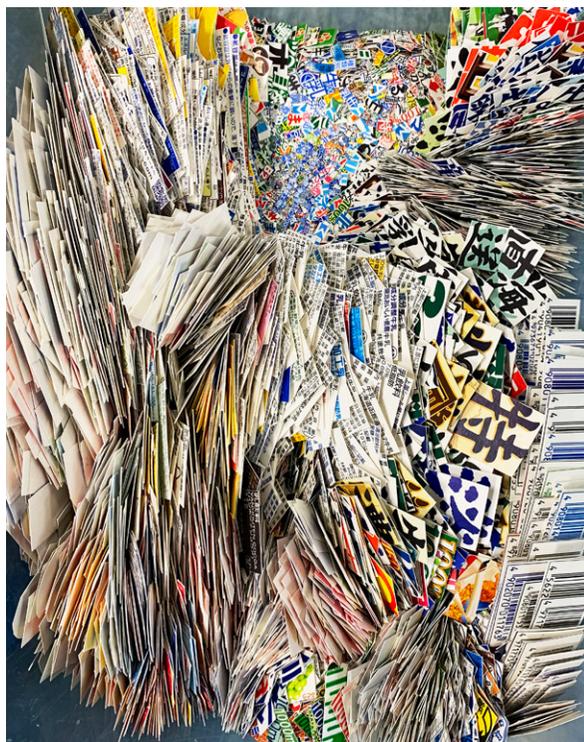
Q. 作品の発信について

- 主に展覧会や販売の機会が多い。販売は月2～3回の場合も。大阪、兵庫が多い。
- 販売は、委託先での販売の方が売れ行きがよい。外で知ってもらって、そこからこのアトリエに来てもらう、ということが多い。

Q. 展覧会の機会

- 販売ほどではないが、展示の機会は年に4～5回ある。最近では「capacious」（大阪府の、府内の障害のあるアーティストを発信するプロジェクト）や「art space co-jin」（京都府の、障害のある人の作品を扱うギャラリー）など、外部からの声かけ、コラボで伝える機会が多い。そういった展覧会では、自分たちが思いもよらなかった展示の仕方、作品の見せ方をするので、展示のクオリティも含め自分たちが勉強になることが多い。

▼牛乳パックの立体作品



コケちゃんが描かれた絵とお皿



Q. 展覧会の反応や成果

- ワークセンターとよなかは、作品とグッズをセットで見せる場合が多いのが特徴的かと思う。(前述の「コケちゃん」の作者、渡辺悠太郎さんの絵画と陶芸商品など) 作品のファンがそのままグッズも買うため、作品を身近に感じてもらう機会が多いと思う。

Q. 課題や今後の展望について

- 自分（西脇さん）以外の、専門性をもたないスタッフのサポートについて、どうしても「アートはちょっと」となってしまう。苦手意識があったり、そもそものアートについての理解などの部分をどう深めていくのかが課題。そこで、アート活動を単体として考えるのではなく、生活、仕事、表現の循環、利用者、スタッフ、家族のなかでの価値観の共有をできるような循環をつくることをこころがけている。
- 外へ仕事をつくっていくこと。活動の創成期は施設職員が現場のケアからアウトプットのマネジメントまで、すべてしていくのは必要だが、それは継続しない。完全にでも、半分でも外部の人に入ってもらうことが大事だと思う。最近自分も手放せてきている。
- スタッフがいなくなると仕事もなくなってしまうこと。以前シルクスクリーンの機材を導入してスタッフも入ったが、Tシャツづくりなどの受注がうまくいかずに、いったん中断してしまった。利用者のはたらき方がスタッフ側の都合でかわってしまうのは課題だと感じる。

Q. 最近の活動について

- co-jin の展示では、利用者の作品だけではない、行為の部分も含めての表現を伝えることができた。
- 奈良市の「Good Job! センター香芝」の声かけで、高島屋新宿店での商品販売をしてもらった。かなりの売り上げになり、販路を広げる機会になった。



▲柔らかな雰囲気の施設のなか

⑤社会福祉法人新明塾 ju: 彩ギャラリー

調査日：2020年1月24日（金）

調査者：中島香織、大井卓也

基本情報

- ・ サービス種別：就労継続支援B型（工房ソラ）、
就労継続支援B型・生活介護（山科教室）
- ・ 所在地：京都市東山区松原町291
- ・ 利用者数：20名（工房ソラ）、20名（山科教室）、8名（ju: 彩ギャラリー）
- ・ 団体の沿革：1975年に発足。1996年協働作業所「工房ソラ」を開設し京都市から認可をうける。2000年に協働作業所「山科教室」を開設し、2003年に新明塾として社会福祉法人化。両作業所から希望者がju: 彩ギャラリーへ通う。
- ・ 活動内容：障害のある人が絵画の制作や造形活動を行っている。

見学内容

京都市の四条通、鴨川を横目に進み、新門前通りへ。古美術商や骨董品屋などが軒を連ねるこの通りをぬけ、にぎやかな東大路通りに面して小さな看板が出ていた。なかの様子は見えない。扉を開くと木がふんだんにつかわれた、温かみのある空間が広がっていた。すぐ目に飛び込んでくるのが、中央にある大きな一枚板のテーブル。ギャラリー代表の松村さんが描いたドローイングを建築士がテーブルに仕立てたのだという。壁にはメンバーの描いた作品が飾られ、音楽がほどよい音量でかかっていた。

松村さんと話をしているうちに、ひとり、またひとりとメンバーがやってきて自分の画材を広げては、それぞれのペースで制作していく。送迎サービスをつかって一緒に来る人もいた。松村さんは時々「〇〇さん今日も寒いなあ」「元気やった？」などと声をかけながら見守っていた。蜜蝋のクレヨンや、色鉛筆などを手に静かに画面にむかう。日記のようにある時の出来事を絵にする人、抽象的な形を不思議な余白を残しながら描く人。少しの間、手をとめて私たちと挨拶をかわすとまたすぐに制作にもどる。描

くことの喜びが静かに身体に満ちているようだった。メンバーのなかには、新明塾の発足当時から通っている人もおり、昔のことを私たちに教えてくれた。制作の様子を見ていると、自分の作風が確立している人もいれば、どんなことができるか色々な方法を試しているような人もいて、この場所で互いの表現を見たり感じたりすることで、蓄積されていくものがあるように感じた。



2階は高い天井と木の梁が特徴的なスペース。照明やピクチャーレールなどギャラリーとしての設備が整っている。

松村さん曰く、このスペースを活かしたいという思いがあるとのことだった。織り、陶芸、フェルト、刺繍……これまで新明塾で作ってきた作品が保管されていた。どの作品の作者もこの日、この場所にはいなかったが、ものすごい年月と表現の厚みを感じずにはいられなかった。なかでも、ガラスの板にメンバーが似顔絵を描いた作品は、同じ素材に描くからこそ、それぞれの持ち味が表現されていた。

昼食の時間、松村さんが作った味噌汁をいただく。昼食後はおしゃべりする人、うたた寝する人も。私たちもほんの数時間の滞在にも関わらず、すっかり家のようにくつろいでしまった。

午後はギャラリーの周辺を散歩した。近くの商店街では買い物も。根を詰めて制作するのではなく、こうして外の空気を感じて地域の人とも交流をしながら、生活とともに創作活動が存在していた。(中島)

インタビュー [松村和子さん (ju: 彩ギャラリー代表)]

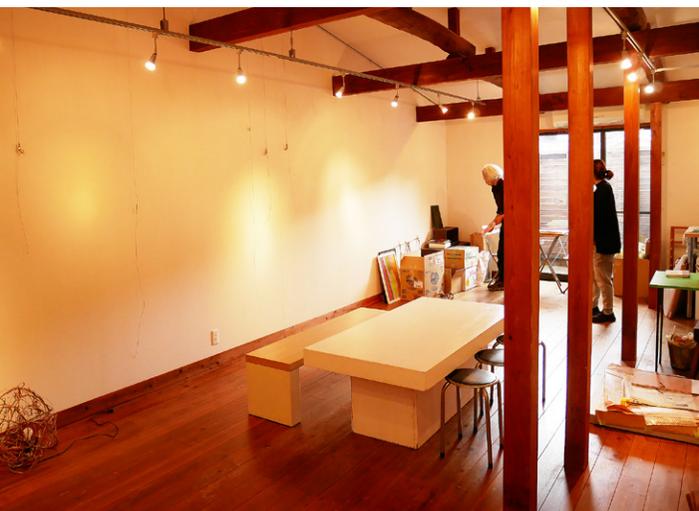
Q. 新明塾の設立から創作活動への経緯について

- 松村茂さん(和子さんの夫)が立ち上げた。最初に通っていた人は7,8名。とにかく、障害のある人と一緒に何かをすることを楽しんでた。
- 20年間は、健康診断や就職斡旋、字の練習や水泳といった生活支援を主にしていた。そのころはどこへ行くにもいつもメンバーが一緒に家族のようだった。
- 作業所ができてから、染や陶芸、織などの創作活動をはじめた。当時は、掃除の仕事で材料費を稼ぐような形だった。
- 製品開発をして、それを販売してということを目指していたが、継続していくには難しいことも。
- 障害者自立支援法が施行されてからは、粘り強く作品をつくりこんだり、積極的に絵を描いていた人も、必要に迫られて外へはたらしにいくようになってしまった。

Q. 印象に残るメンバー

- 色鉛筆で鮮やかな風景を描く藤橋貴之さん。彼のような存在がほかのメンバーにも大きく刺激を与えていると感じる。現在は就職し、自宅で制作を続けているが、今で

▼二階のギャラリースペース



もずっと交流が続いている。

- 目立たないような糸でも、藤橋さんがゆっくり織っていくときれいな織りができたり、松村さん自身も色々なことを藤橋さんから学んだ。

Q. ギャラリーでの創作活動に至る経緯

- 建物はもともと茂さんの親類の家だったものを改装し、2009年にオープン。年に5回ほど展覧会を実施した。
- 新明塾の山科教室では清掃や軽作業、ものづくりを行っており、ものづくりの部門が2019年7月にギャラリーに移ってきた形。

- 作品がすでにたくさんあるので、2階のギャラリー一部分で作品を見せたいと考えた。

Q. 松村さんご自身について

- 油絵をやっていた。今はデッサンをするくらいになったが、それでも自分が描いていないと、描くことの楽しみというは伝えられないと考えている。
- 自分自身、描くことで力をもらえると信じているし、描くことですっきりとすることもある。

Q. 心がけていること

- 初期のメンバーとは今も色々な形でつながっている。この土台の上に今があるということを大切にしている。
- とにかく一人ひとりが違うので、何をやっても面白い。
- 絵を描くこと、ものをつくることよりもまず、友達とおしゃべりしたり、料理をしたり、生活がきちんとおくれることを大切にしたい。そうしたことを通して、自分の気持ちを伝えられるようになってほしい。
- 絵を描くとき、自分の感じていることが出てくる。生活が変わるときっと絵も変わると考えている。

Q. 今後に向けて

- メンバーも年を重ねてきた。色々制作してきたが次になにをするか、自分も負けていけないという気持ちでいる。
- 2階のギャラリーについて、もちろん自分のやりたい気持ちもあるが、メンバーと一緒にやっていきたい。みんながいいと言ったら、そこから、意見を聞きながら進めたい。
- 最高齢のメンバーは73歳。それぞれに毎年変化がある。どんなものが生み出されるのか未知なことばかりで、それを楽しみたい。

⑥特定非営利活動法人 PRP きょうと きょうと WAKUWAKU 座

調査日：2020年2月14日（金）

調査者：中島香織、大井卓也

基本情報

- ・サービス種別：自立訓練（生活訓練）、就労継続支援 B 型
- ・所在地：京都市右京区常盤窪町 18 にしがきビル 2 階
- ・利用者数：30 名
- ・団体の沿革：2001 年 2 月に演劇関係者と精神保健福祉従事者によって結成される。2002 年 7 月に特定非営利活動法人として認可。
- ・活動内容：演劇や紙芝居、南京玉すだれ、バルーンアートなどの表現活動を行う。ほか、はたらくために必要な技術を身に着けるために、お菓子の袋詰めや清掃、毎日の生活に必要な知識や技術を身に着けるために、料理や金銭管理の練習なども実施。

見学内容

曜日によって演劇の脚本づくりの日と、稽古の日があるとのことで、今回は稽古の日に訪問した。WAKUWAKU 座の同フロアには「ふれあい交流サロン てあとろ」がありカフェや展示スペースとなっている。ここではたらくメンバーもいたり、お茶をしにくる人がいたり、展示が行われることもあり、地域とつながる場所になっていた。

到着するとすでに稽古がはじまっており、スタッフ 2 名を含む 8 人が台本を手に車座になっていた。緊張感の漂う空間。台本ができてまだ間もない読み合わせの日ということで、私たちも出来立ての台本を目でおいながらやりとりについて

いった。驚いたのは、その内容。精神障害のある人の日常がリアルに描かれていて息をのんだ。ある時は病院で、ある時は衣料品店で。家族の、店員の、警察官の、そして幻聴の、心ない言葉の数々。読み合わせなので身体の動きはない。それでも、時折指でなぞりながら淡々と読み進められる、セリフとト書きから否応なくイメージされる風景があった。休みの人のセリフ部分は「じゃあ〇〇さん、ここお願いします」と柔軟に配役される。あっという間に 30 分ほど経っていただろうか。一区切りになったところで、スタッフが声をかけながら、読んでみてどうだったか、やりにくいところはなかったか、などを全員で振り返る。「ちょっとまだここが読みにくいけれど練習したら大丈夫だと思います」など、自分の今の出来を冷静に見ている意見もあった。全員が発言し、どんなに声の小さな人のことばも聞き合う雰囲気が出ていた。そこからまた再開し、別のシーンを読み合わせ・振り返りをして稽古が終了した。

稽古の最中はまさか写真を撮影するような心持ちにもならず、気がつくともまだ 1 枚も撮っていなかった。すると「写真いますよね！」と言って再度、ある場面を読み合わせていただいた。「シリアスな場面を演じる」演技、を撮影するという構図が、これまでの緊張感との対比で妙に可笑しい。ここでようやく空気が緩んだことで、逆説的ではあるが、演劇に参加している人たちがそれぞれ自分の目的、ある意味でのプロ意識をもって望んでいることが感じられた。（中島）

▼施設の入り口



Q. 活動の経緯

- 京都で作業所が徐々に増えてきていたころ、表現活動を中心にした作業所があってもいいのではと考えたことがきっかけ。自立支援施行時は下請けの仕事もしておらず、表現活動は仕事と認められなかったため、すぐに認可をうけることができなかった。
- 今井さん自身は実家がお寺で、檀家さんを回っているときに精神疾患の人と出会う。今井さん自身、当時フリーターだった自分は社会に属していないように感じていた。PSW という仕事があることを知り、興味をもった。そこで、ボランティアで WAKUWAKU 座にきた。
- ここ 10 数年は皿回しや南京玉すだれなどの大道芸を行っていて、地域の人にも知られてきている。ある時区の保健センターから、うつを題材にした演劇をやらないかと声がかかり、メンバーからもやってみようという声が出て以降、演劇に力をいれている。
- 自分の病的体験と役の線引きが上手くできず、状態を崩すという課題が出てきたため、まずは紙芝居からはじめた。
- 2017 年頃、自分たちの経験を伝えたい、自分たちがどういった人なのか分かってもらいたい、という意見がメンバーから出るようになってから、オリジナルの演劇をつくるようになった。

Q. 参加するメンバー・スタッフについて

- 演劇をやりたいと言って通いはじめた人は長く来ている人が多い。新しいメンバーのな



▲台本の読み合わせの様子

かには、B型としてはたらくために通ってきて、周囲の人の様子を見て、徐々に演劇に参加するようになった人もいます。

- メンバーは演劇という表現を通して、自分以外の人々がどのように物事をとらえているのかを感じることができている。自分自身の体験と距離をおくために、演劇に参加しているという人もいます。
- 声を出さず練習のために参加したいという人や、映像だけで出演する人もいます。公演の際の裏方スタッフやチケットのもぎりなどもメンバーが行い、出演だけでなく色々な関わり方がある。
- 表現活動の時間にも時給をつけている。練習に40円、公演本番は200円(自主訓練はその半額)といった体系。
- スタッフは、現在常勤が4名、非常勤が3名。理事のなかにも福祉分野の職員としてはたらきながら演劇をしている人がおり、関わってもらいながら活動している。

Q. 作品づくりのプロセス

- 参加しているメンバーのなかで希望者による実行委員を結成し、テーマを決め、それをもとに台本をつくっていく。基本的には自分たちの体験談からストーリーを組み立てていく。2019年3月の自主公演「翔平がんばりま Show!」「Yesterday&Tomorrow」では「幻聴のしんどさ」「被害妄想のしんどさ」というテーマをもとにした。
- 台本づくりは実行委員が行っている。また、くるみざわしんさん(劇作家・精神科医)に協力いただいている。
- 今取り組んでいる新作は、目的やストーリー、構成を考えながら、半年ほどかけてつくってきた。
- 前回の公演では、誰がどの役をするのか配役についてのフォローや、演出をスタッフが担当していた。新作では、そういった部分も実行委員が自主的に行えるよう、進めている。

Q. 気をつけていること

- チームワークに重きを置いている。作品をつくっていく段階でなにか行き違いがあっても、最終的に舞台を乗り越えると仲間になれると感じる。
- 語ることが苦手な人も多いため、ふりかえりの時間を大切にしている。
- 作品づくりに関するミーティングには、PSWが入るようにしている。ソーシャルワーカーに精神的なケアの部分は協力してもらっている。
- 演技指導には、舞台関係の人にアルバイトとして関わってもらっている。
- WAKUWAKU座で取り組んでいる演劇自体は精神障害のある人にとって、リスクもある。一般の劇団での活動は難しくても、そうした人たちが演劇をできる場をつくるということが大切だと考えている。

Q. 演劇をすることによる周囲の反響やメンバーの変化

- 自分のことを表現できるようになると、作業を行っている人など演劇に参加していない人にもよい影響があるように感じる。訪れた人からはよく明るい施設だと言われる。
- 公演前はやはりナーバスになる人が多かったが、公演後はお客さんからの反応を受け

▼同じフロアにある「ふれあい交流さろんてあとろ」



て励みになった人も。一方で、お客さんの目線が気になり、被害妄想につながってしまうという事もあった。

- 2019年の自主公演では、公演をやり遂げたことで自信がつき、自分の存在意義を見出せたという人がいた。その人は次の事業所へステップアップしていったが、演劇は続けていきたいということで WAKUWAKU 座に参加している。

Q. ほかの団体や地域とのつながり

- 障害のある人らが劇団員として活躍する、まちプロ一座（滋賀県大津市）とは交流が続いている。
- 医師のなかには、WAKUWAKU 座の活動に理解を示してくれ、患者さんに WAKUWAKU 座を案内してくれる人も。

Q. 今後に向けて

- 表現活動と福祉的な支援を両輪でやっているが、どう着地点を見出していくのかということには難しさもある。
- 障害のある人が、ただはたらくための場所ではなく、それぞれがやりたいことを実現しながら生き生きとはたらいていくことのできる場をひらいていくことが重要と考えている。そのためにも、メンバーが自分のやりたいことを自分自身の手で実行できるようにということを見据えながら、これからの活動を続けていきたい。

⑦一般社団法人 one DAYLIGHT

調査日：2020年3月4日（水）

調査者：大井卓也、森下静香

基本情報

- ・サービス種別：就労継続支援B型
- ・所在地：大和高田市磯野新町1-30
- ・利用者数：14名
- ・団体の沿革：2018年10月に開所。
- ・活動内容：古民家をリノベーションしたカフェの運営と、絵画などの創作活動を中心とした活動を行っている。

見学内容

昼前、11時半ころに施設に到着。建物は白い漆喰の瀟洒な古民家で、玄関口には「DAYLIGHT」のロゴがプリントされた暖簾が垂れ下がっている。玄関を上がって奥に進むと、右手に厨房、左手にテーブルが並ぶカフェスペースがある。座席はカウンターとテーブル席を合わせて20席程度。昼食時ということもあり、たくさんのお客さんでテーブル席はほぼ埋まっていた。右手の厨房ではスタッフとメンバーが食事の準備を行っている。部屋の壁面にはメンバーが描いた絵画や作文などが飾られており、また、壁際の一角ではつまみ細工の小物（ヘアピンやストラップ等）などが販売されていた。そのほか、照明やオーナメントといったしつらえも整えられており、また、左手奥には窓ガラス越しに広がる庭を見ることができ、開放的で明るい雰囲気のある空間だった。

私たちがカフェで昼食をいただいた後、スタッフの加藤さんにご案内いただき、施設を見学させてもらった。カフェスペースの隣にはやや小ぶりな部屋があり、そこはメンバーが創作活動を行うスペースになっていた。1人のメンバーが壁際に置かれたテーブルで、タブレット端末でYouTubeの動画を見ながら休憩をとっていた。加藤さんの紹介によると彼は今、日本の古い「刀剣」に凝っているらしい。仕事に戻ると刀剣の雑誌を見ながら、画用紙に刀の絵や、その説明文のテキストを描きこんでいった。そのタイミングで創作をしているのは彼1人だけだったが、ほかのメンバーもそれぞれがやりたいことをする、という方針で、絵画だけでなく、つまみ細工やドライフラワーのスワッグ（花束）づくりをしたり、と幅広い創作活動を行っているという。また、先ほどまでカフェスペースではたらいっていたメンバーのみなさんは休憩時間に入り、各自昼食を食べたりしながら、思いおもいに時間を過ごしていた。

その後、カフェスペースに戻り、加藤さんへのインタビューを実施した。印象的だったのは、私たちがデイライトに到着してからインタビューを終えるまで、カフェスペースの奥のテーブルで会話を花を咲かせている女性のお客さんたちがいたことだ。その様子からは、デイライトのカフェが地域のなかで憩いの場になっていることが感じられた。（大井）

▼古民家を改装したカフェ





▲カフェの店内

インタビュー [加藤淳子さん (スタッフ)]

Q. 施設の成り立ち、活動内容について

- 開所はおととしの10月。代表である浦林さんが立ち上げた。
- 事業としてはカフェの運営を中心に就労継続支援B型事業として活動を行っている。
- 施設としてカフェをはじめようと思ったきっかけは、カフェであれば色々な人が来ることができ、障害のある人が地域とつながっていくようなスペースをつくることのできる、と思ったため。
- 定員は、直近の目標としては毎日10名の利用者が利用できるようになることを目標にしており、現在は大体日に6名くらいの利用者が通所している。
- 利用者は知的障害の方と、精神疾患の方が主になっている。現在、7割くらいが精神疾患の方。
- 仕事の内容としては、カフェの業務を中心に、創作活動やおかしづくりなど、メンバーそれぞれの関心や能力に合わせて仕事をしてもらっている。
- メンバーは「カフェ業務に興味がある」、「アート活動やものをつくることに興味がある」といったきっかけで通所される方が多い。
- 給与体系としては、月に2日出勤したメンバーには基本給のように一定の賃金を支払い、また、それに加えて1日ごとに日給を支払っている。
- カフェとしては11:00～15:00のランチタイムを中心に運営しており、また、朝は9:30～モーニングも提供している。
- カフェ業務以外には、学校へのお菓子の方も販売を行ったり、聾学校から受注を受けてお菓子を販売しに行ったりしている。



- メンバーには精神疾患の人が多く、人とのつながりが苦手な方も多いのだが、日々の仕事を通じて、人とのコミュニケーションが生まれてきているように感じている。
- スタッフはパートタイムの人も含めて5名で、メンバーと一緒に調理などの業務を行っている。
- 創作活動の支援については代表の浦林さんが中心になって行っている。

Q. 創作活動について

- それぞれのメンバーがやりたいことをやるという方針で、活動を行っている。
- つくった作品の発信については、今は、カフェ店内で展示をしたり、ショップの紙袋に絵を描いたり、といった形で行っている。それを見たお客さんから「かわいい」といった反応をもらえることが、メンバーも励みややりがいにもなっているようだ。

Q. 今後の展開について

- まずは、デイライトを訪れてくれるお客さんをもっと増やしたいと思っている。また、訪問販売先なども広げていきたいと思っている。

※本調査の後、代表で施設の設立者の浦林さんへも、改めて施設を立ち上げたきっかけなどに関して、メールで聞き取りを実施した。

Q. 「DAYLIGHT」として活動をはじめられた経緯を可能な範囲でお教えてください。

- 当事者の方々が地域生活をおくる上での選択肢として DAYLIGHT があればとの思いではじめました。私が成人の入所施設出身であり、当事者の選択肢が広がればその方々の人生のプランが広がるのではとの思いが強いです。しかしながら入所施設の大切さや重要性も十分に理解していますので、あくまでも多様性のなかでの選択肢として DAYLIGHT のような形態の場所があればと思っています。また、今の場所での活動の経緯は福祉に理解のある大家さんに出会えたことが大きいです。古民家で雰囲気も良く、のんびりとした DAYLIGHT の雰囲気はこの場所や環境の要因も十分に有りこの場所を提供いただいている大家さんには感謝しています。

Q. 「DAYLIGHT」はアートを活動の軸に据えていると伺ったのですが、今のスタイルのアート活動はどのように始まったのか、またどのように創作の支援を行っているのか、お教えてください。

- DAYLIGHT のアートの捉え方はコミュニケーションの手段としてほかの誰かに届きやすいとの思いから地域での活動をしていく上ではとても重要と捉えています。アートを通して人々が集い、想いが生まれる。それはアートの力だと信じています。またカフェの形態も同様にコーヒーや食事によってコミュニケーションとなりそれぞれにストーリーが生まれる。
アートやコーヒーを挟んで素敵な時間や楽しい時間を共有できることが我々にとっての目的です。そういったところに共感して頂けたメンバーが集まり今の形になってきました。画材に関してはこちらでご用意できるものはご用意しますが、用意の範囲外では実費もあります。また寄付も頂いたりしています。

Q. 活動に関して、現在感じている課題や、今後やってみたい展望などがありましたらお教えてください。

- アートに関しては展覧会や物販、ほかのアーティストとの交流など今後チャレンジして行きたいです。カフェも、ますます充実を図りより多くの方々に来て頂いてアートやカフェを通して地域に必要とされる場所となって行きたいと考えています。

3) 調査を終えて、所感

今回の調査を経て、第一に印象に残っているのはそれぞれの団体のスタッフたちが、とても前向きに活動をされていたということだ。私たち中間支援団体は「アート活動の支援」ということを考える時に、どうしても現在ある課題にはたらきかけることに焦点を当ててしまいがちなように思う。しかし、今回のインタビューに答えてくださったみなさんは、もちろん、資金やスタッフの体勢の不足といった課題点もあげながらも、次はこんなことをしてみたい、と今後の展望や希望を語ってくださった。例えば、「スコモジーナ」の池端さんが語ってくださった、メンバーの作品を活用した子ども服ブランドの構想は、聞いているこちらもワクワクさせられるようなパワフルなものだった。障害のある人のアート活動が全国的に広がりつつある今、これからの支援のあり方として、課題に注視するだけではなく、「こんなことをやりたい」といった気持ちや夢を引き出し、一緒に考えていくようなアプローチもあり得るのではないかと感じさせられた。

また、次に印象に残っているのは、スタッフがメンバーのみなさんに寄り添い、何がしたいか、どんな手助けがあれば創作活動を行えるか、と一緒に考えながら活動を続けられていたことだ。例えば、「デイライト」ではメンバーのみなさんの特色や趣味に合わせて、手話の講座やつまみ細工といった独自の活動が生まれ、施設全体の活動の幅が広がっていた。また「WAKUWAKU 座」では、台本作りから上演まで、そのすべてのプロセスをメンバーによる実行委員会が主導になって行い、スタッフがそのサポートをできる体制が作られていた。また、「ライフスペース・プロペラ」の山崎さんの「ゴロゴロしているだけの人がいたとしても、それはその人の仕事としてとらえられるスペースをつくりたいと思った」という言葉も、大変示唆的だろう。福祉施設などでアート活動を行う場合、つい、福祉という既存の現場に、アートという異質なものをプラグインするような意識をもってしまう人も少なくないように思う。しかし、そうすると現場からは「アートのことが分からないので、何をすればよいのか分からない」、「創作の支援のノウハウがない」といった悩み事が生まれてくることもあるだろう。そうではなく、「今、一緒にいる人たちと何ができるか」というスタート地点から一緒に活動を考えていくことが、施設のなかでアート活動をはじめる第一歩として大切なのだろう。そしてまた、そういった、寄り添いながらやりたいことを探していく視点は、ケアの現場にこそ、その知識が蓄積されているのだろうとも感じられた。

そして、活動を続けていくためには、施設やスタッフ全体としてその活動を支えていく姿勢や体制づくりが大切なのだということも強く感じられた。例えば、平成7年から活動が続けられている「糸をかし」では、メンバーへの支援はもちろん、職員を対象とした表現ワークショップも行っているという。このように、スタッフも当事者となってアート活動を行っていけるような意識の共有が糸をかしの活動を支えてきたのだろう。一方、「ワークセンターとよなか」の西脇さんは「施設職員がケアからアートのマネジメントまですべてをしていくことはもちろん大切だが、活動を継続していくためには外部の人に入ってもらうことも必要だ」と話された。このように、全てを施設の内部で進めていくだけではなく、外部に協働できる専門家や協力者をつないでいくことも、活動の継続には必要なかもしれない。

そして最後に、「新明塾」で20年以上にわたってメンバーのサポートをしてきた松村さんの「最高齢のメンバーは73歳だが、それでもそれぞれに毎年変化があり、今後どんなものが生み出されるのか未知なことばかりで、楽しみだ」という、長きにわたる活動のなかで、日々を楽しみ、これからの展開を考えていく姿勢には、とても勇気づけられる気がした。(大井 卓也)

II. 展覧会「であう、つたえるをかんがえる」

◆ 展覧会の概要

昨年度、障害とアートの相談室では、近畿ブロックの支援センターの合同事業として、展覧会「めぐるアートをめぐる」展を開催した。これは、近畿で生まれている、障害のある人のユニークな表現や取り組みを、作家の創作している空間や周囲の人とのつながりなど、その背後にあるストーリーと合わせて紹介する展覧会だった。本年度はその展開系として、障害のある人のアート作品とどう向き合い、どう楽しむのか、ということに焦点を当てた展覧会「であう、つたえるをかんがえる」展を開催した。

展示を行ったのは、京都・下京区にあるファブカフェ（3Dプリンタなど、デジタル工作機械をつかったものづくりのできるカフェ）「FabCafe Kyoto」と、中京区にあるアートギャラリーと宿泊スペースが一体となった施設「KYOTO ART HOSTEL kumagusuku」。展示の前には、まず、ファブカフェとアートホステルのスタッフに向けて、障害のある人が創作したアート作品や、作品かどうかわからないもの（製作途中の作品や、作品の素材、作った本人はアートだと思っていないかもしれない造形物など）を紹介する「であう」ワークショップを実施した。そしてワークショップの後半には、それぞれのスタッフに、自分の関心や自分たちのスペースの特性に基づいて作品を選び、展示の方法を考えてもらった。

その後、実際に2つの会場にて展覧会を実施。カフェのテーブルや、ホステルの客室のベッドサイドに作品が飾られるなど、いわゆるギャラリーでは見られないようなユニークな見せ方が生まれ、「アートの捉え方」や、「生活のなかでアートを楽しむ方法」の多様さを感じられるような展示となった。また、展覧会場の特性から、障害のある人のアートに関心のある人だけでなく、観光客やクリエイター、ものづくりに関わる企業の人など、多様な人に展示を見てもらうことができた。

展覧会『であう、つたえるをかんがえる』

< 会期 >

2020年3月20日（金）～27日（金）

< 会場 >

- ・ FabCafe Kyoto ファブカフェ京都
（京都府京都市下京区本塩籠町 554）
- ・ KYOTO ART HOSTEL kumagusuku
京都アートホステル クマグスク
（京都府京都市中京区壬生馬場町 37-3）

< 出展団体 >

- ・ 社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房 [滋賀]
- ・ NPO 法人スウィング [京都]
- ・ 特定非営利活動法人コーナス アトリエコーナス [大阪]
- ・ 特定非営利活動法人 100年福祉会 片山工房 [兵庫]
- ・ 社会福祉法人わたぼうしの会 たんぼぼの家アートセンター HANA [奈良]
- ・ 社会福祉法人一麦会 Po-zkk [和歌山]

< 共同企画立案 > 宮下忠也





『であう』ワークショップで大事にしたこと

矢津吉隆（美術家／kumagusuku 代表）

- ・アーティスト以外の人がつくる表現に興味があるので、今回作品を選ぶ際に「表現と表現じゃないものの境目を考える」ということを自分の中で設定した
- ・ギャラリーの展示作品については、どんな作品を展示しても成立するので、表現として完成しきっていない作品群があうと思い、舟木花さんの作品を選んだ
- ・客室での展示作品については、空間に花を添えるように、単体としての完成度の高い作品を選んだ
- ・作品との距離が近いので、じっくりと見てもらえるもの、絵肌のディテールが細かいものを選んだ

木下浩佑（FabCafe Kyoto コミュニティマネージャー・Fab ディレクター）

- ・フィジカルな部分での感動があった作品を選んだ。触った感じや、絵具に唾液が混ざっているといった情報、薬の殻やボタンの感触、重さなど。解説を聴きながら気になった作品を選んだ
- ・絵画作品についてもグラフィカルかつ立体的な感じ。平面的だが出てくるものを選んだ
- ・個人的に「痕跡を残すこと」に関心があるので、今回見た中でも生活や活動の記録としての表現が心に響いた

会場=ファブカフェ京都
展覧会の模様



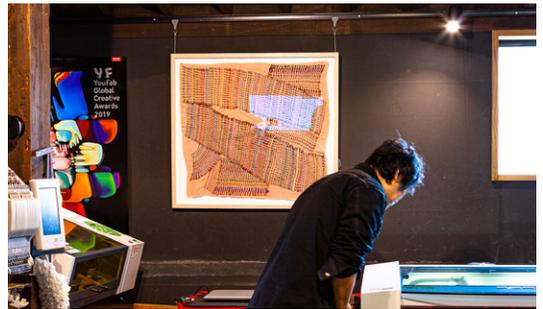
▲「jurix works」伊藤樹里 (たんぼぼの家アートセンター HANA)



▲ (左から)「無題」河野竜司 (アトリエコーナス)、
「まる」河合由美子 (やまなみ工房)、「お城」大家美咲 (やまなみ工房)



▲「齋藤」白井望 (片山工房)



▲「五色の色とその他の色」田中乃理子 (やまなみ工房)



▲「運動会」神山美智子 (やまなみ工房)



▲「ポズックの見守りだるま」山田隆一 (Po-zkk)



▲「竹」宿利真希 (たんぼぼの家アートセンター HANA)



▲「マスク」萩原宏一郎 (たんぼぼの家アートセンター HANA)

会場=京都アートホテル クマグスク
展覧会の模様



▲「無題」高橋茉奈美 (Po-zkk)



▲ 舟木花 (たんぼぼの家アートセンター HANA)



▲ 舟木花 (たんぼぼの家アートセンター HANA)



▲ (左から)「ジョニーデップ」「動物園」清水千秋 (やまなみ工房)



▲「紫色の玉」井村ももか (やまなみ工房)



▲「陸を見つめる鷹」XL (スウィング)



▲「踊るマドンナ」XL (スウィング)



▲ (左から)「すましているゴリラ」「空飛ぶユリカモメ」Ackey (スウィング)

展覧会をふりかえって

矢津吉隆 (kumagusuku)

今回、一階のスペースでは船木花さんの個展という形で企画させていただきました。彼女（舟木さん）の作品と出会ったばかりの私が個展など企画してよいものかと正直思いましたが、やってみるととても楽しく取り組むことができました。様々な形式の作品を同じ空間に、併せて展示した事で、作家の方の色々な側面に触れることができ人となりが見えるようでした。訪れた人が先入観なくすんなり展示として受け入れてくれている様子が興味深かったです。健常者の作家さんで彼女と同じような制作手法の人がいるけど、彼女の方が断然面白いねと言っていたお客さんがいました。これはスタッフからの感想ですが、受付に飾った平面作品に衝撃を受けたとのこと、彼女も絵を描くので、純粹に制作に向かう勢いに圧倒されたようです。僕もあの作品は未だに頭から離れません。

木下浩佑 (FabCafe Kyoto)

今回参加してよかったと思うことが2つあります。1つはさまざまなタイプの作品をカフェやものづくりの空間に展示することで、予期しない組み合わせが生まれたこと。2つめは、それによって観賞とは違う体験ができたことです。作品に対して、たとえば具象か抽象か、といった話ではなく、また作家のバックグラウンドや制作意図を知ることでもなく、「そこになにかものがある」ことがいいのだと思いました。FabCafeという空間自体が、ものをつくることを知っている人や関心がある人、サービスを受けるといよりは主体的に空間をつかうことに慣れている人たちです。関わるスタッフも、いわゆる展覧会の空間やルールづくりではなく、作品と来場者のコミュニケーションが生まれる空間づくりができていたので、作品を楽しむ人が増えたのではないかと思います。そして今回展示された作品が、障害のある、なしではなく、作り手の共感を得るクオリティだったことが大きいと思いました。

宮下忠也 (本展企画共同立案)

本展覧会を企画するにあたり、まず最初に、「近畿ならではの福祉とアートの関わり方を広く発信すること」を目標に掲げました。しかし、近畿ならではとはどのようなものか。私たちは、著名な芸術家や学芸員が主導、評価するのではなく、地域に暮らす人たちがそれぞれの得意分野を生かしながら、価値観を創造、共有しようとする姿勢がそれにあたるのではないかと考えました。そこで、展示作品を私というひとりのキュレーターではなく、展示会場の関係者数人に選定してもらい、さらにそのキャプションとして有名人の推薦コメントや大きな展覧会への出展歴、障害者アートの公募展の受賞歴ではなく、その作り手の周囲にいる無数の無名の人たちのコメントを集めるなど、展示作品や受け手の解釈に多様性をもたせる仕組みを考えました。残念ながら新型コロナウイルス感染症の流行により完全な形で実施することは叶いませんでしたが、さらなる可能性を感じる展覧会だったと思います。



困ったとき・情報がほしいとき・学びたいときは・・・

たんぽぽの家では、障害のある人のアート活動について、みんなで課題を共有し、学びあう機会をつくってきました。2014年からは「障害とアートの相談室」をオープン。お悩み相談や研修の実施などを通じ、情報交換やネットワークの場づくりを行っています。みなさんも何か相談したい、学びたい、といったことがございましたらお気軽にお声かけください。

“ハンドブック”のご案内

下記のハンドブックは「障害とアートの相談室」ウェブサイトでご覧いただけるほか、ご希望の方には無料で送付しております。上記のメールアドレスからお申し込みください。



なやんで ひらいて 2歩すすむためのハンドブック

障害のある人のアート活動を支援について、具体的な課題や実践者の事例を、マンガを交えて紹介したハンドブック。これからアート活動をはじめてみたい、アート活動で悩んでいることがある、といった方へ。



地域にひろがるオープンアトリエ すずんでひらいてつながるための ハンドブック

上記のハンドブックの続編。障害のある人のアート活動を地域に広げていくためにはどんな可能性があるのか、様々な事例とともに考えます。できていることがある、といった方へ。



トークシリーズ 障害のある人のアートと評価 あなたの「ものさし」聞かせてください!

障害のある人のアート活動を広めていくにあたり、作品をどう評価するのかを考えることは大切な視点です。そこで、障害のあるアーティスト、大学の先生、美術館の職員など、様々なゲストを迎えてアートの評価に関するトークを行いました。本ハンドブックはそのトークの講演録です。

障害とアートの相談室

で検索してみてください!

<http://artsoudan.tanpoponoye.org>

- 1 相談窓口の設置
- 2 研修事業（施設見学ツアー、インターンシップ、セミナーなど）の実施
- 3 ネットワークづくり、作品、作家の調査・発信（調査、書籍の出版、展覧会開催など）

【映像】

新型コロナウイルス感染症の影響を受けて中止となった研修のトーク映像を YouTube にて公開しています。そもそもアートとはどんなものなのか、そして障害のある人とアート活動を行うことにはどんな可能性があるのか、幅広く議論しています。ぜひご覧ください。

【福祉をかえる「アート」セミナー in 豊中】

配信版 → <https://youtu.be/ws8TKCLXgko>

▼出演者・プログラム

- ・ 森口ゆたか 『社会をかえるアートの力』
- ・ 西脇大祐 『障害のある人の創作の現場から考えたこと』



【福祉をかえる「アート」セミナー in 芦屋】

配信版 → <https://youtu.be/WFcnantK400>

▼出演者・プログラム

- ・ 岩淵拓郎 『”なんだこれ？”から考えるアート』
- ・ 室本早知 『すたじおぼっちの取り組みから』



令和元年度
障害者芸術文化活動普及支援事業
近畿ブロック広域センター
障害とアートの相談室
事業報告書

発行：2020年3月31日

発行元：一般財団法人たんぼの家「障害とアートの相談室」

〒630-8044 奈良市六条西3-25-4

Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501

E-mail artsoudan@popo.or.jp

U R L <http://artsoudan.tanpoponoye.org/>

【監 修】

大井卓也、岡部太郎、中島香織（一般財団法人たんぼの家）

【協 力】

井尻貴子

※本報告書は「令和元年度 障害者芸術文化活動普及支援事業」
（厚生労働省）の一環として制作しました。



相
談
室
の
ア
ー
ト
と
障
害